Selfの解放

—アドリエンヌ・リッチの場合—

木　村　淳　子

女性はその一生のうちに、幾度かの大きな転機を迎える。勿論、様々の形での転機を経て、試練を乗り越えていくのは、男性とて同じことであろう。幼年期、思春期、青年期を経て、男性はハンターとしての能力を開発し、一家の養い手となっていく。これが人間の歴史始まって以来の、男性の担ってきた責任であった。そのために、男性には、女性よりも早くから、教育の機会が与えられ、社会人としての役割が、当然の権利・義務として与えられてきた。現代の社会においては、女性にも男性と同じ権利・義務が認められている。しかしその歴史は浅い。一般的に女性の高等教育が認められるようになったのは、日本では第二次大戦後であるし、社会進出において男性と同等の権利を叫ぶ声が高まったのは、ごく最近のことである。文明の進歩、文化の発達と、人間の意識の変革の速度は仲々うまく歩調が合わない。そこで、これまで当然男性のものと考えられていた部分に女性が入りこもうとすると、何がしかの摩擦が生じるのも当然のことである。

さて、視点を女性の側に限ることにしよう。幼年期から男女共学の学校で学び、大学或はさらに大学院へと進んで、男子に伍して、その能力を高めて行く。教室の中では学問的な能力が高く評価されるから、性的差別はほとんど感じずにすむだろう。やがて転機が訪れて、社会に進出する。結婚する。高等教育を受けた女性が、ことに、悩むのはこの時で

ある。男性よりもより強く、深く、己の実存の意義について、女性は思い患い、悩む。日のよく当たる教室の中で、あんなに輝いていたはずの自分の能力が、異なる土壌に移植されて萎れていくのを見ることの辛さ、持てるものを充分に発揮できない無念さを、女性は切実に感じ、焦立つ。

アドリエンヌ・リッチ（Adrienne Rich）は1929年生れの詩人である。「私の幸運は、アメリカ中流の白人家庭に生れたことであり、書物に囲まれた家の中で、父親に読むこと、書くことをすすめられ、励まされたことだ」[(1)]と、リッチは語っている。父の教育方針により、初等教育は家庭内で受けた。豊富な蔵書の中から、イギリス浪漫派の詩の数々をはじめ、古典から現代にいたる多くの詩人、作家の作品を読み漁った。1951年には処女詩集を公けにし、ラドクリフ大学を卒業する頃には詩人として名をなしていた。「およそ20年間、私は特定の男性のために書いてきたのだったが、彼は批評をしてくれ、ほめてくれ、自分は本当に特別な人間なのだと、私に思わせてくれた」[(2)]とリッチが言う特定の男性というのは、即ち父親のことであり、父親はまた、彼女の詩を読み、好意的に批評することを惜しまない、多勢の他の男性達、先生や先輩の作家や詩人達の代表でもあった。やがてリッチは50年代の女性の理想とするところに従って、幸福な結婚をする。30歳になる頃までに彼女は三人の息子の母になるが、その頃から次第に彼女の胸中には、自分は女性として、詩人として、失格者なのだという意識が芽生えていった。根なし草のように漂っている自分に焦立ちを感じるようになっていった。男女に共通の一つの体験が、全く正反対と言ってもいい程の効果を与えるのが、結婚であろう。女性にとって結婚は、それまで拠りどころにしていたものすべてから切り離されることを意味する。しかもそれは、実際に結婚してみてはじめて知ることのできるものである。リッチはこの時期、詩は仲々書けなかった、と言う。「伝統的に女性に課されている役割を、これまでの女性たちがやってきたような方法でこなすことは、(現実を)破壊して

新しく作り上げていくという想像力の機能とは相容れないものである。」[(3)] リッチは、自己の胸中にわだかまる、現実に対する怒り、焦立ちをばねにして、この相容れぬ両者の接点を見出そうとした。1965年に書かれた詩〝Orion〟[(4)]は、夜空に輝くオリオン座を半ば血を分けた兄弟と見なしながら、彼女自身の胸中を表白する詩と読み取ることができる。

Orion

Far back when I went zig-zagging
through tamarack pastures
you were my genius, you
my cast-iron Viking, my helmed
lion-heart king in prison.
Years later now you're young

my fierce half-brother, staring
down from that simplified west
your breast open, your belt dragged down
by an oldfashioned thing, a sword
the last bravado you won't give over
though it weighs you down as you stride

and the stars in it are dim
and maybe have stopped burning.
But you burn, and I know it;
as I throw back my head to take you in
an old transfusion happens again :
divine astronomy is nothing to it.

Indoors I bruise and blunder,
break faith, leave ill enough
alone, a dead child born in the dark.
Night cracks up over the chimney,
pieces of time, frozen geodes
come showering down in the grate.

A man reaches behind my eyes
and finds them empty
a woman's head turns away
from my head in the mirror
children are dying my death
and eating crumbs of my life.

Pity is not your forte.
Calmly you ache up there
pinned aloft in your crow's nest,
my speechless pirate !
You take it all for granted
and when I look you back

it's with a starlike eye
shooting its cold and egotistical spear
where it can do least damage.
Breathe deep ! No hurt, no pardon
out here in the cold with you
you with your back to the wall.

オリオン
からまつ林を　ジグザクに
私が歩いていったとき　はるか後方の
あなたは　私の天才、厳格なヴァイキング
獅子の心持つ囚われの王者だった。
年を経て　いま　あなたは若く

血を分けた　荒々しい兄弟となる。
胸を開いて、飾り気のない西の空から
見おろしているあなた、刀帯には
古めかしい刀が吊るされている。
あなたの歩みにどんな重みがかけられようと、
はずすわけにはいかぬ　最後の虚飾

そこに嵌めこまれた星は　もう燃えつきた
暗い星だ。
だが　あなたは燃えている。私は知っている。
あなたを見ようと振り向くとき
昔の気持が　また甦える
神聖な天文学には関係のない。

家の中で私は傷つき、つまづき
信じる心を失い、孤独のまま
取り残される、死児が闇の中で生れる。
夜が煙突の上で砕ける。
時の破片、凍った大地が

格子の中に降りそそぐ。

男が私の眼の背後に近づき
その眼が空だと気づく
女の頭が鏡の中の私の頭から
そらされて、
子供たちはわたしの死を死につつある
私の命のかけらを食べながら。

憐みはあなたの得手ではない。
空の高みであなたは静かに傷つく
鴉の巣にピンで留められて
言葉をなくした私の海賊よ！
あなたは全てを当然のことと受けとる
そして私が振り返るとき

冷たいエゴイスティックな光の矢を
放ってくるのは星のような眼
傷つけることなど少しもできぬのに。
深く息を吸い込め！寒い戸外に
あなたと共に在るとき、痛みも許しもない
壁を背にしたあなたと在るとき。

暗い冬空に輝くオリオンを、リッチは暗い壁に留められている不運の勇者と見る。それは、家庭の中に閉じこめられた己の姿の写しである。まっすぐに目的に向って進むことのできない、ジグザクにしか進めない「私」の日常に対するあせり、焦だち、自己憐愍の気持を、極めて冷静に

うたって成功している作品である。五連目は、己のアイデンティティを失ないつつある自分の眼を「空」(empty)とうたい、「子供たちは私の死を死につつある／私の命のかけらを食べながら」とうたいながら、感傷は少しもない。そこにリッチの巧みさを感じる。同時にこの詩には、勇者オリオンに対する憧憬もうたわれているが、己をオリオンに擬すことによる一体感の表現に、言わば伝統的な男と女の愛情のかたちを読者にさりげなく読みとらせている。後年のアグレッシヴなリッチの姿は、この詩にはまだ見られない。

Night Watch[(5)]

And now, outside, the walls
of black flint, eyeless.
How pale in sleep you lie.
Love : my love is just a breath
blown on the pane and dissolved.
Everything, even you,
cries silently for help, the web
of the spider is ripped with rain,
the geese fly on into the black cloud.
What can I do for you?
what can I do for you?
Can the touch of a finger mend
What a finger's touch has broken?
Blue-eyed now, yellow-haired,
I stand in my old nightmare
beside the track, while you,
and over and over and always you

plod into the deathcars.
Sometimes you smile at me
and I—I smile back at you.
How sweet the oder of the station-master's roses !
How pure, how poster-like the colors of this dream.

夜番

そしていま、戸外、黒い石造りの
塀には、覗き穴もない。
蒼白い眠りの中にあなたは横たわる。
愛、私の愛は窓ガラスに吹きかけられて
たちまち消える息。
すべてが、あなたさえもが
ひそやかに助けを求めて泣いている。
蜘蛛の巣は雨に裂かれ、
雁の群れは黒い雲の中に飛び去る。
あなたに何をしてあげられよう？
あなたに何をしてあげられよう？
指がさわって毀したものを
指でさわって直すことができようか？
いま青い眼、黄色い髪をして
私は線路の傍の悪夢の中に
佇つ、そしてあなたは、
くり返し、くり返し、いつも
死の車輛の中にとぼとぼと入って行く。
時々あなたは私に笑いかける
私は—私は笑み返す。

この夢の、ポスターの色のような鮮やかさよ

この詩は1967年に書かれた。〝Orion〟から二年後である。この詩の中の「私」は、〝Orion〟の「私」よりも外に対して開かれている。焦立ち、嘆いていた「私」は、外部の人間である「あなた」に対して心を開く。「あなた」が何者であるか、それはどうでもいいことであろう。男であれ女であれ、「私」の悪夢の中に出てくる「あなた」は、助けたくても助けることのできない苦境に陥っている。「あなた」は、黒い塀の中、即ち強制収容所に入れられたユダヤ人であるかもしれないし、或は別の虐げられている人間であるかもしれない。「私」は、虐げられた人について、何をしてあげられるだろうかと、自問する。人間が毀したものを、人間の手でもういちど直すことができるのだろうか。この詩には、より広い、大きな愛が読みとれる。己の置かれた状況に焦立ちと怒りをおぼえていた詩人が、自己憐愍に陥ることなく、その状況をしっかりと踏まえて、他者に眼を向けた時に、詩人を超えた詩人へとドラスティックな変貌を遂げていったのだと、私には思われる。リッチと時代を共にしたふたりの詩人、アン・セクストン、シルヴィア・プラスと比べてみると、リッチの特徴は、より鮮明に浮かび上る。

アン・セクストン（Anne Sexton, 1928-1974）、シルヴィア・プラス（Sylvia Plath, 1932-1963）もまたアメリカ東部、ニューイングランド地方を故郷とした詩人達である。それぞれに、己のおかれた女性としての位置に満足を見出し難く、己の存在の意味を生涯かけて探りつづけた。リッチと同じポスト・ロマン派の詩の流れを汲む詩人達である。一時期、リッチも含めて彼女達を告白詩人という呼稱でまとめようとしたこともあった。それは、極めて特異な個人的な体験をもとにした詩、セクストンとプラスに関して言えば、彼女等の精神的不安定状態に伴なう経験を、

或は家族の様々なしがらみを、明らさまに詩の中にうたいこんだからであった。しかしながら、同じレッテルを貼られても、これらの詩人達の個性は全く異なっている。

セクストンはアメリカでも由緒深い旧家の出身である。高校を卒業するとすぐに結婚して家庭に入りふたりの娘の母となった。極度の神経衰弱に陥ったのはその頃であり、それ以来彼女は幾度か精神病棟での生活を余儀なくされた。詩作は不安定な自己のアイデンティティ確認のための作業として始められたものである。セクストンの場合、精神の安定をかき乱し、己を焦立たせ、怒らせる原因は、常に自己の心理の深層にひそむものとして考えられている。ランボーの「饑餓の饗宴」にヒントを得て書かれた〝Flee On Your Donkey〟[6]の中では、底知れぬ饑餓感が己を狂気へと追いやる、と述べる。「これは狂気／だが一種の飢えだ(This is madness/but a kind of hunger.)」そして、「私を苦しめるのは私の胃袋だ（It is my stomach that makes me suffer.)」詩人は、この饑餓感から、ちょうど悪王ヘロデの追手から驢馬に乗ってエジプトに逃れた、幼な子キリストをかかえたマリアとヨゼフのように逃れようとする。〝Rowing〟[7]では、詩人の内部に潜むのは、ねずみである。「私は私の内部にいるねずみ／私をさいなむ悪いねずみを放逐しよう。(…I will get rid of the rat inside of me,/the gnawing pestilential rat.)」

セクストンの詩の世界は、D. W. ミドルブルックの批評する通り狭いものである。[8]セクストンは決して己の影の外に足を踏み出そうとしない。それどころか彼女は、己の内部に深く入り込みながら、女性の性、生理をうたう。ただし、これは詩作をする上での彼女の心理面と、取り上げる題材についてである。詩の形やタイプは、むしろ開放的で、シミリ多用の拡散的なものである。

シルヴィア・プラスは、ボストン大学の詩のクラスで、アン・セクストンと知り合って以来、亡くなるまで極めて親しい友人関係を続けた。

プラスもまた、彼女自身の女性としての存在に深く心を留めた詩人であり、存在の不条理さに強い不満、怒りを抱いていた。父は15歳でアメリカに渡ってきたドイツ移民であり、母はオーストリア系の人であった。アメリカで生れ育ったプラスではあるが、東部の伝統あるアメリカ人の町では、この家族は異色であったろう。父はハーヴァード大学の生物学の教授であったが、彼女が幼い頃に亡くなり、以後は母の手で育てられた。幼い頃から彼女は秀れた文才を見せ、スミス大に進む頃には、詩や短編小説の懸賞に当選して、将来の詩人をうかがわせている。プラスもまた、リッチやセクストンと同様、女性の現状に甘んじてはいなかった。というよりもむしろ、ふたりの詩人以上に、己の置かれた状況に苦しみを見出し、感じていたにちがいない。そして、その苦しみは、セクストンとはちがって、絶えず外部から押し寄せてくるものであった。詩集*The Colossus*の中の〝The Eye-mote〟は、風に巻き上げられて眼に入った塵をうたいながら、外部から己を脅かす、悪を表現している。ある晴れた日、詩人は丘辺に立って、草を喰む馬を眺めていた。風が馬のたて髪に、尾に吹きつけている。突然塵が眼に飛び込み視界を暗くした。塵は眼に突きささり、痛ませた。「私」はエディプス王のように盲目になってしまったのだ。最後の連で詩人は次のように言う。

What I want back is what I was
Before the bed, before the knife,
Before the brooch-pin and the salve
Fixed me in this parenthesis ;
Horses fluent in the wind,
a place, a time gone out of mind.

私がとり戻したいのは

床につく前の、ナイフに傷つく前の、
ブローチが、軟膏が、
この括弧にくくりつける前の私、
風の中でたて髪を、尾を靡かせていた馬、
心の中から消えた場所と時間。

「私」をかき乱し、不幸にするのは眼に入った塵ばかりではない。「私」の外にあるものすべて、人間も自然も気象もが「私」にとっての脅威となる。結婚して移り住んだ英国での生活は、彼女に一層の圧迫感を与えるものだった。詩集*Ariel*は、プラスが自ら命を絶つ直前の数か月間に書かれた詩を集めたものだが、そこには外部からの脅威に追いつめられていく女性の心理が、凝縮された語法のなかに読み取れる。

詩風の全く異なるセクストンとプラスではあるが、共通しているのは女性として自らの立場、位置に気づき、怒りながら詩を書いていったということ。また詩を書くことが、リッチも言う通り、このふたりにとっても自己発見 (revision) の作業であったということである。しかしながら、あまりにも深く自己に沈潜しすぎた結果、このふたりの詩人は外界への繋りを断たざるを得なくなってしまったのではなかろうか。人間がつけた傷は、人間によってしか癒されないことを、忘れてしまったのではなかろうか。怒りと焦り立ちの中で苦しみをワープしようとした時、プラスもセクストンも、この世の時間の外に飛び出してしまった。

リッチはセクストン追悼の文の中で、生前のセクストンのエピソードのひとつを語っている。(9) それは1966年にハーヴァードで催されたヴェトナム反戦の朗読会の時のことである。著名な詩人、作家達が、ある意味では月並みな死と暴力のイメージを用いた反戦の作品を朗読したのに対し、セクストンは静かな優しい声で〝Little Girl, My Stringbean My Lovely Woman〟を朗読した。いかにも母性的な詩であるが、これこそ

まさに反戦の詩であったとリッチは言う。セクストンはフェミニストではない、だが、それまで誰も詩の題材とはしなかった女性の生理や堕胎、愛などをテーマに用いて、その後の女性詩人達の道標の役割を果たしてくれた。そして、この追悼文をリッチは次のように締めくくる。「私はアン・セクストンを姉のように思っている。彼女の作品は、私達が何に立ち向い抗って行かねばならぬかを教えてくれる。…彼女の詩はこれまでの女性達が生きていた、そしてこれからは決して生きていってはならぬ破滅への道の道標である。…作品によって彼女はなお私たちと共に在る。ティリー・オルセンが言ったように、物を書く女性は生き残るのだ。」

見なおすこと、即ち振り返り、新しい眼で見、新しい方向から批判しつつ古いテキストを読む、という行為は女性にとっては単なる文化史の一頁に属することがらではなく、生きるという行為につながるものだとリッチは主張する。[10] 己の置かれた状況を把握することなしに己を知ることはできず、己を知ることによって女性は、男性支配の社会が潜ませている自己破壊的な傾向を拒否することができる、というのがフェミニストとしてのリッチの主張のようである。父性によって育てられたリッチが己を発見し、確認した時に、そして眼を自己の内部から外に向け、他者を確認できた時に、彼女はポスト・ロマン派の詩人から癒し手(healer)としての詩人へと大きく変貌した。その要因のひとつが植民地事代の詩人アン・ブラッドストリート（Anne Bradstreet）の生き方であったことは、まことに興味深い。ハーヴァード大学出版部の『アン・ブラッドストリート作品集（*The Works of Anne Bradstreet*）』の出版に際して求められたエッセイ、〝The Tensions of Anne Bradstreet〟[11] の中で、アンの生涯と詩を紹介しながら、次のように述べている。「アン・ブラッドストリートが偶々アメリカに最初に移住した女性のひとりであり、ヒロイズムが社会の要諦であり、男も女も個人として、また社会の構成員として生存のために戦っていた時代、場所に生きていたということは、充分

考慮に値することである。」[12]

1974年にリッチは*Diving into the Wreck*によってナショナル・ブック・アウォードを受賞した。同時にノミネートされたアリス・ウォーカー(Alice Walker)、オーダー・ロード（Audre Lord）との共同受賞であったが、これはリッチの主張が認められてのことだった。この詩集でのリッチは現実を直視しようとする意識にあふれている。標題作の〝Diving into the Wreck〟は、難破して海底に沈んだ船を調査するために、ひとりで潜水する体験をうたったものである。「私」は、まず神秘な話の書いてある本を読み、カメラとナイフを用意し、潜水服を着て海に潜る。たったひとりで、縄ばしこを一段一段と降りていく。やがて視界は青くなり、暗くなり、「私」は先刻とは全く異なる世界に入ったことを知る。岩の間に生棲する生物の姿に、一瞬「私」は水に潜った目的を忘れる。「私は難破船の調査に来たのだった。」その言葉が目的を思い出させ、道案内となって、「私」はライトを照らしながら難破船を見てまわる。それは生きて泳いでいる魚や岩に生えている海藻よりももっと永久的なものだった。「私」が求めてやって来たのは、難破船にまつわる話ではなくて、難破の実体そのものなのだ。死者達は眼を開けたまま、顔を太陽の方向に向けてそこに在る。半ば砂に埋もれた積み荷の樽、腐蝕した材木、毀れた羅針盤。「私」はそれらを確かめるために、深い海底へと降りて来たのだった。

We are, I am, you are[13]
by cowardice or courage
the one who find our way
back to this scene
carrying a knife, a camera
a book of myths

in which
our names do not appear.

我々は、私は、あなたは
臆病ゆえか勇気ゆえか
ナイフとカメラと
神秘な物語の本を携えて、
この場所へと戻ってきた
本の中には
我々の名前など
見当たらない

私もあなたも、即ち我々はみな何がしかの幻想を抱き、それに頼って生きている。或は幻想に振りまわされ、傷ついているのかもしれない。自己卑下、女性蔑視、誤った同情、誤った感情に溺れること、この四つの害毒を克服できれば、女性は心身のバランスをより良く保って、生存と再建の仕事に従事することができるのだ、とリッチは考える。[14] 難破船の調査のために海底に潜ることは、即ち確固とした現実を把握しようとする試みに他ならない。私、あなた、我々。リッチは、ナショナル・ブック・アウォードをすべての女性の名において受賞した。リッチの詩作の原動力は、女性の陥っている状況に対する怒りである。「空想の中での私の怒りが眼を洗い／その怒りからこまやかにものを知る／慈愛の心が流れ出す」(my visionary anger cleansing my sight/and the detailed perception of mercy/flowing from that anger)[15]

己を知り、己の置かれた状況から女性の状況を知って怒るリッチは、先駆者としての己の使命を充分に自覚している。

If I'm lonely
it must be the loneliness
of waking first, of breathing
dawn's first cold breath on the city
of being the one awake
in a house wrapped in sleep[16]

私が孤独だとしたら
それは最初に目覚める者の
味わう孤独
街にかかる暁の最初の冷気を
吸いこむ者の
眠りに包まれた家の中で
ひとり目覚めている者の　味わう孤独

いまなお、第一線の詩人として活躍するリッチの詩を評価することは容易ではないが、その生活のダイナミックな展開ぶり、それと軌を一にする詩的世界の広がりには、まことに興味深いものがある。彼女の思想的な展開は、フォーマリストとして出発した詩の形式を自由律へと変えていった。「詩は形式なしには存在することができないが、形式は無意識のうちから現れてくるものと、経験から生まれてくるものとの間の力関係、又は対話の結果として形をなすものでなければならない。」[17]「詩は何よりもまず、言語を批評するものであり…詩は言語の持つ力の凝集したものである、それは私たちが宇宙のあらゆるものと窮極的な関係を結ぶための力である。」[18]というリッチの言葉の中に、現実をしっかりと把握しながら、現実を超越（変革）しようとする意志を読み取ることができるように思う。

注(1) "When We Dead Awaken:Writing as Re-Vision" in *On Lies, Secrets, and Silence*, by Adrienne Rich, Norton, P.38（以下この本のタイトルを*O.L.S.S.*と略記する。）

(2) *ibid*, P.38

(3) *ibid*, P.43

(4) *Leaflets: Poems* 1965-1968, by Adrienne Rich,P.11

(5) *ibid*,P.26

(6) *Live Or Die*, by Anne Sexton, P.4

(7) *The Awful Rowing Toward God*,by Anne Sexton,P.1

(8) "Poet of weird Abundance",by Diane Wood Middlebrook, in *Anne Sexton:Telling the Tale*, ed.by S.E.Colburn

(9) "Anne Sexton:1928-1974", in *O.L.S.S.*

(10) *O.L.S.S.*,P.35

Re-vision—the act of looking back,of seeing with fresh eyes,of entering an old text from a new critical direction—is for women more than a chapter in cultural history: it is an act of survival.

(11) *O.L.S.S.*, pp.21-32

(12) ibid, P.32

(13) "Diving into the Wreck" in *Diving into the Wreck*, p.22

(14) *O.L.S.S.*, pp.122-123

Self-trivalization,contempt for women, misplaced compassion, *addiction*(to "Love");if we could purge ourselves of this quadruple poison, we would have minds and bodies more poised for the act of surival and rebuilding.

(15) "The Stranger" in *Diving into the Wreck*, p19

(16) from "Song" in *Diving into the Wreck*, p20

(17) *An American Triptych*, by Wendy Martin, p.169

(18) *O.L.S.S.*,P.248